

# 世界遺産登録を契機に生まれた 新しい宗教文化

春日大社における春日山鍊成会の活動から

New Religious Culture Born by Registration as World Heritage :  
From the Activity of Kasugayama Renseikai in Kasuga Taisha Shrine

川合泰代

KAWAI Yasuyo

はじめに

①世界遺産登録に対する春日大社の反応

②春日山鍊成会の歴史

③春日山鍊成会に集まる人々

おわりに

## 【論文要旨】

本稿は、世界遺産に登録されたことを契機に、古くからある日本有数の神社の一つである春日大社の内部から、春日大社にとって新しい宗教文化が生まれ、根付いていった過程を明らかにしたものである。

春日大社では、世界遺産に登録されたことをきっかけに、歴史的に長らく春日信仰における重要な聖地でありつづけ、一般人の入山が禁じられ続けてきた春日山に、神社の神職が案内しながら、一般人が登拝する活動がスタートした。これが春日山鍊成会の原型である。この活動は2009年で10周年を迎えた。

登拝ルートや登拝形式は、史実をもとに、現在の春日大社の神職により構成された。

春日山鍊成会の参加者は、今まで春日信仰と縁が深かった血縁や地縁による社会集団に属す人々ではなく、今まで春日大社と縁がなかった人々に多い。そしてそのほとんどが、個人的な関心事から個人単位で参加する。

現在の春日山鍊成会の状況を見ると、リピーターになる人々が多くみられ、28回という参加回数を持つ人もいる。その要因の一つとして、参加者の聖なるものを希求する気持ちを満たすものが、春日山鍊成会にあるからだと推測される。

春日山鍊成会が行う、聖地春日山を登拝する活動は、世界遺産の理念とも共通するものがあった。そして、春日大社に今まで縁がなかった人々のうち、聖なるものを希求する人々に受容され、今後も続いていくと予想される。

【キーワード】世界遺産、春日大社、新しい宗教文化、春日山鍊成会、聖地